老松
よりまさ
井筒
はちの木
羽衣

三

老松

次第 實におさまる四方の國〳〵關乃戸さゝで通はん 抑是は都の西梅津乃何某とハ我事也 我北野を信し常に歩をはこひ候に有夜乃霊夢に我を信せハ筑紫安楽寺にしまいりをとげ

らるゝ御夢を蒙りて西に向ひ
九州より下向仕り何ゟもなか
なる御時のしだめも有や日乃
本の國豊なる秋津州の浪も
声もあさなよつ乃海原も静り
ならび調乃道の末賢く安楽寺にも
吾なまきらく
梅の花笠春色

きて此梅て小鳥乃轉る木
乃梅色も時めきてどかくり深き緑
う那風もと敬そひらりよひらく
年のもも千乃松乃ように盛へ
て息ようなる四方乃ま末広
のめくるなをひくりと春めき渡る風
心此歩ミともに宮寺のそゞろ長

風き寿の日より　上歌 松がねの岩まを
つたふ苔むしろ 敷島の道までも
実ありがたや此山の風もかきる雪の
ふる枝も惜まるる花盛手折りや
もるとも守る梅の花垣いざやかこはん梅の
花垣をかこはん
ワキ詞 いかに是なる老人
よに寄るべき木の下の
シテ詞 此方の下をそ
やら何をかしこそ
ワキ 風のひたふるとひ
ツレ詞 言ふも
梅とはゆきの末とやらそ
愚や神楽は唯紅梅殿と松をあがめんへ
下歌 言ふも紅梅殿と咲やくべきことやあらんも
此詠こそよりべき木と松のこゑへは
おのめぐくも年あさきたびに松竹へ
シテ詞 梅こそ若き松を老とかき節り

あらはれて出づ　ワキ　面白や是も墻ゆひ
まはし御志あさからず殊に妙なる神木
とみえて候いか様是ハ老松の
シテ下同　さうらふも心ゆ給ふかや紅梅殿ハ御
覧せらる色も若木の花守とも
花やかなるに引かへて　これ我
はへは老ゆる身乃隠家なるひたるまつ人

の翁さびしき此もとて老松と御
覧あさからぬ神木ともいはるるや
ワキ同　扨々当社乃謂委く御物語候へ
シテサシ　夫社壇の様を見奉れば北に峨々
たる青山あり朧月松閣の中に
映じ南に寥々たる瓊門あり斜日
竹竿のもとによすきまり　左に火焔

乃輪塔あつて翠帳紅閨乃枝ひ昔を
思ひ出よ古寺の旧跡あつて晨鐘乃
梵声響たゆる事あし万代の
あ宮子まなりとやをそかしこき浮世の
ことわざまでも数々の諸木の中
よ松梅ハ殊よ天神乃御自愛にて紅
梅殿も老松も皆末社と現し給へり

ウ然るに此ふたつの木ハ我朝よりもなを
漢家よ徳を顕し唐の帝乃御時ハ
国よ文学さかんなれハ花乃色もまし
匂ひ常よりも増りたる文学すたれ
ハ匂ひもなく其色も深からす扨こそ文
を好む木なりとて梅をハ好文木
とハ付られたりさて松を大夫と云ゑの

又秦乃始皇の御狩の時天俄にかき
曇り大雨しきりにふりしかば帝雨を
しのがんと小松の陰によりたまふ此
松俄に大木となり枝をたれ葉を
ならべ木の間すき間をふさぎて其
雨をもらさゞりしかば帝大夫といふ
爵を贈り給ひしより松を大夫と申

なりかやうに名高き松梅の花も
千世の行末ひさにみつぎそなふる
へしくや神は宮も杉もむかし乃天
満る空もくれなゐの花も松ももろ
ともによろづよ乃春こそや千世よろ
づ代のためしとかやうれしきかな
あやにたちゆきくゞ泚松陰に様居

してはも晴くとうの時節の告を
も猶さえし　め行よ紅梅殿
ど我のまれ人をば何とう慰め給ふ
やさ　地「言めつらかまされもたち
シテ「梅も色そひ　地「松とくも　シテ「名社
老木乃若みどり　地「宮もあらたまる
神かくら　「哥をうたひ舞をまひ

地「かくを備ふる宮寺の色もみちたる
がりこや　シテ上「さくら桜乃かつく梢はわる
末乃花の袖　シテ下「是は老木の神松
乃　是は老木の神松乃ちよよや
ちよよさゞれ石の巌となりて
苔のむすまで　シテ中「苔のむすまで
松竹鶴亀の　上「よはひをさづくる

此君の行末を守らんと我神
託乃告を知らする松風も梅も
久しき春こそめでたけれ

頼政

ワキ是ハ諸國一見乃僧にて候我此程
ハ都に候ひて洛陽乃寺社殘り
なく拜み廻りて候又是より南都
よし有ける(に)やと思ひ候
いなり乃社にまいりつゝ我行末を
深草や木幡乃關をもとを越て伏見

のさゞなみし瀬々の水上尋ねき
て宇治の里にも着きにけり
急ぎ候ほどにこれははや山城の里
山の姿水の流れまでも里橋の景
色かな所の名所あらば里人
の来り候
シテ なう〳〵御僧は
何事を仰せ候ぞ
ワキ 是ハ此所始て

一見の者にて候此里にまかりて
所々名所旧跡教へ給へ 所
に住む人ならばいやしき宇治の里人な
れば名所旧跡いさしら浪のうら
のよ舟と橋とにかゝる瀬々の
たゞ世を渡るばかりなる所の舊
跡とは何とか答へ申べき
ワキ いや左様に

古歌に曰く勧学院乃雀ハもうぎうをさへづる
と聞ときハ所乃人ハみなまうす
世ハ心よりよみ詠し先喜撰法師が住
まれ庵をかくし乃経をかくしけり
シテ 所ハ様大事乃事を申寿あれ
喜撰法師が庵ハ我庵ハ都のたつみ
志かぞすむ世を宇治山と人ハいふ也

下 〽人ハまことに主たるもの尉ハ
志らず 文あまた一村の里乃みえし
て候ふ荒木乃鳴候 ヲ 寺社橋乃槇乃
鳴きやべ又宇治乃河鳴きやあり
是よみしたる小鳴らハ シテ 名所たち
あれハ小鳴らハ 向ひよみしつる寺ハ
世を横急心の僧都の法を説し寺

げにあなく旅人あまり賢きよ
上哥 名にも似ず月こそ出つれ朝日山やまぶ
きの瀬に影見えて雪さしくだす柴
小舟山も川もおぼろ〳〵として是
非をわかぬ景色かなげにや名にしおふ
都に近き宇治の里聞きしに増る
名所かな〳〵 シテ詞 如何に申べき事の候

平等院とや申御寺のやうに見えて候それ
にて候 ワキ詞 不知案内の事なくば猶よ
きやうに教へ候へ シテ 此方へ御出候へ
是こそ平等院にて候へ又是なる釣殿と
申て面白き所にて候能々御覧候へ ワキ 扨これ
もろき所なくば先見成物を
これは扇のごとく残されて候は何と

やたるやうてゆく シテ さん候此芝之
に付て物語乃候語て聞せ申候
昔此所に宮軍のありしに源三位頼
政合戦に討負給ひ此所に扇を敷き自
害し給ひぬされば名将乃古跡なればとて
扇のなりに取残して今に扇乃芝と申
候 ワキ 痛はしやさしも文武に名をえし

人なれ共跡は草露乃道の辺となつて
ぞ行人征馬乃ゆくゑのごとしあら
いたはしや候 シテ 実によく弔ひはあるべ
きかも其宮軍乃月も日も日こしけふに
当りて候はいかに ワキ 何と其宮軍乃月
も日も今日に当りたるとはや シテ 斯様
にや申せば我ながら余所にあらぬ様

人乃ゆめの枕は露の世ゝよびなみえんと
夢ありたがふつとな思ひ給ひそよ
夢乃浮世の中宿の、くうら雲
橋守年をへて若乃浪もうら
渡も遠方人に物申我頼政が幽霊
やさおもあるもあへもせよきりく
梅が頼政乃幽霊かゝるよ顕き我よ

詞をとゞめしきるやいたや跡帰も
はさと思ひよる人の浪枕行も
むかし此庭の扇の芝を行數て夢は
契りとゞまたのよし　血は滴鹿
乃行と脇ぐ波たゝを流し　白眼
骨をくだくよそ宇治川の細代の
浪あらし脇浮寝や伊勢武者は皆

地
大蔵のよろひきらく宇治のあしろよ
ぶりきるはしのかの氣莫なき無常よ
か蝸牛の角のあらそひもはかなかり
けるこゝろかなあら貴の法師や御経
讀給へ かきやなお法師のことなく
甲冑を帯しば經よめと取るならず
様関つる源三位の其幽霊なるまし

まひぬ 宮や紅園生に植ゑても隠
なしなのつゆぬけまよ頼政と名乗りを
祈法ろうしきれば所経より給へ
御心易く思召せ五十展転の功力は
よ成仏まちよ疑ひなし まして
宮直道よ 帰ひなきる法乃もろ
あひよりひさり前のなるも 平等院

上哥乃庭の面　思ひ出たり　佛在世に
仏の説し法の場と成し平等大
会の功力に頼政が仏果をえしこそ有
難けれ　今は何をかつゝむべき是ハ
源三位頼政執心乃浪に浮沈む因果
乃有様あらはすなり　抑治承乃
夏の比よしなき御謀叛をすゝめ申し名

も高倉乃宮の内を忍びてよそに有
明乃月の都を忍び出て　うき時
しもに近江路や三井寺さして落
給ふ　クセ　去程に平家ハ時をめぐらさず
数萬騎乃兵を関乃東に遣はすと聞えし
かば宮ハ音羽乃山つゞき山科乃里近き
木幡の関をよそにみて家ゟうき

世のさかひこそうち乃行橋打渡り大和路指て急きしよ寺と宇治との間にて関路の駒のひまもなく宮は六度まで御落馬にて煩らせ給ひけりこれは先の夜御寝ならさる故なりとて平等院にして暫御座を構へ宇治橋乃中の間引はなし

ざる程にまつこゝろへよたつ兵共よ白旗をなびかして寄する敵を待ゐたり

去程に平家の兵宇治川の南の岸に打望み時乃声矢さけびの音波にたぐへておびたゝし橋の行桁を隔て戦ふ味方には筒井の浄妙一来法師敵味方の目を驚かして平家の

大勢橋はひいたり水はたかしさすが
難所の大河なれは左右なう渡すへ
きやうもなかりし所に田原の又太郎
忠綱となのつて宇治河の先陣我
なりとなのりもあへす三百余騎
くつばみを揃へ河水にすこしもためら
はずむれゐる村鳥の翅をならぶる羽

音もかくやと白浪にざつ〳〵とうち
いれて浮ぬ沈ぬわたしけり忠綱
つはものを下知していはく水の逆巻
所をは岩ありとしるへしよはき馬
をは下手に立てつよきに水を防か
せよながれん武者には弓はずをとらせ
たがひに力を合すへしと只一人の下

知よつてさはかりの大河なれとも
一騎も流れす此方乃岸にをめいてあかれ
ハ味方乃勢ハ我なからも踏もためす
半町計覚えすしさつて切先を
揃へて爰を最期と戦ふたりさる程に
入乱我も我もと戦へハ頼政か
たのミつる兄弟の者もうたれけれ

地

今ハ何をか期すへきと唯一すちに
老武者の是まてと思ひて
平等院の庭の面是なる芝の上に
扇をうち敷鎧ぬき捨座を組て
刀を抜なからさすか名を得しその身とて
埋木乃花咲事もなかりしに身
乃成はてハ哀なりけりとて

たま〳〵御僧にかりそめなから是
とても他生の種の縁に今扇の
芝の草の陰に帰るとてうせにけり
又立帰るとてうせにけり

井筒

是は諸国一見の僧にて候我此程は
南都七堂に参りて候又是より
初瀬に参らばやと存候是なる寺を
人に尋て候へば在原寺とかや申候
暫く立寄一見せばやと思ひ候抑
此在原寺は古へ業平紀の有常

乃息女夫婦住給ひしいそのかミ
なるへし風ふけハ興津白浪たつた
山と詠しけんも此所にての事成
へし　昔語乃跡とへハ其業平乃
友とせし紀乃有常乃つねなき世
妹背をかけて弔ハん　暁こと
乃あかの水月も心やすます覧

さなきたに物の淋しき秋乃夜の
人めまれなる古寺の庭乃松風更
すきて月もかたふく軒端の草わすれて
過しいにしへをしのふ白にていつ迄か
待事なくてなからへんけになに事も思
出の人にハ残る世の中かな　唯いつと
なく一筋に頼む仏乃御手の糸導

びき給へ法乃聲 迷ひをもてら
さ世給ふ御誓ひ げにもと見えて
有明乃ゆくゑは西の山なれど詠ハ四
方の秋乃空 松の聲乃ミきこゆれど
嵐ハいづくとも定めなき世の夢心
何乃音にかさめてまし ワキ詞 我
此寺にやすらひ心をすます折節
いとなまめける女性 庭乃板井を
掬ひあげ花水とし是なる塚に回向
の氣色見え給ふハ如何なる人にてまし
ますぞ 女詞 是ハ此あたりに住者也
此寺乃本願在原の業平ハ世に
名をとゞめし人なれハ其跡のしるしも
是成塚乃陰やらんわらハもくはしくハ

志らねども花水を手向け跡をも弔ひ
まいらせ候　ワキ「げに〳〵業平乃御事ハ
世に名をとゞめし人なりさりながら今ハ
遥かに遠き世乃昔語乃跡成を
志かも女性乃御身として、かやうに弔ひ
給ふ事其在原乃業平にいかさま故
ある御身やらん　女「ゆへある身かと
問給ふ業平ハ其時だにも昔男
といはれし身乃ましてや今ハ遠き
世に故もゆかりもあるべからず　ワキ「尤
もなり去ながら爰ハ昔乃舊
跡にて　女「主社遠く業平の　ワキ「あと
ハ殘りてさすがにいまだ　女「きこえハくち
ぬ世語りを　ワキ「語れば今も　女「昔男の

上哥 同 名ばかりハ在原寺乃跡ふりて松
も老たる塚乃草ハ是ぞそれよなき
跡乃一村すゝきの穂に出るハいつの
名残なるらん草茫々として露深々と
古塚乃真なるかないにしへの跡なつ
かしき氣色かな〳〵
猶業平の
事委く御物語候へ
クリ地 昔在原の
中将年へてこゝに石の上ふりにし里も
花の春月乃秋とて住給ひしに其
比ハ紀乃有常か娘と契り妹背乃心
あさからさりしに又河内の國高安の
里にしる人ありて二道に忍ひて通ひ
給ひしに 風ふけハおきつ白波立田
山 夜半にや君かひとりゆくらんとおほつか

なみの夜るの道行方を思ふ心とげてよ
その契りはかれ〲なり　げに情知るう
たかたの哀れを述べしも理なり　昔
此国に住人の有けるが宿をならべて
門の前井筒によりてうなゐ子の友達
かたらひてたがひに影を水鏡面をな
らべ袖をかけ心の水も底ひなくうつる月

日も重なりておとなしく恥かはしく
互に今はなりにけり其後かのまめ男
言葉の露の玉章の心の花も色そひて
上哥　筒井筒井筒にかけしまろがたけ生
ひにけらしな妹見ざるまにと詠みて贈り
ける程に其時女もくらべこしふり
わけ髪もかたすぎぬ君ならずしてたれか

あぐべきとたがひに讀し故なれやつ
井筒の女とも聞えしハ有常か娘
乃古き名なるべし　げにやふりにし
物語聞ハ妙なる有様のあやしや名
乗りましませ　女上　誠ハ我ハ恋ころも
紀乃有常か娘ともいさ白波の立田
山よはに紛れて来りたり　地　ふし
ぎやさては龍田山色に出る紅葉ハ乃
女　紀乃有常か娘とも　地　又ハ井筒の
女とも　女　恥つかしなから我なりと
いふや注連縄乃長き世を契し年ハつ
井筒の陰にかくれけり
地上哥　更ゆくや在原寺乃夜乃月
昔をかへ衣手に夢待そへてかり

松が音乃せゝらぎ所はさびしく
あつまりとふちよ社たてし櫻花
手向よまれしあまたのきりがやうよ
仏ども秋あれば人侍女ともいられ
あり秋つ井筒の昔よりまゆみ欄
弓手をへて今は世々の世の葉を有れ
筐のあとをしがおよわてだちつりやず首

男よまつり業　宮と両とを花の袖
家よきて昔そをひだ住居乃　寺井
よそめる月そおりやきさき　月や
あらぬ春や昔と詠めしも我の此そや。
つ井筒　つまぐ井筒よりきし
まつるたき　君よきしあ　君よ
にし
きくらや　川おうみちえし昔男

い冠おとしハ女郎花乃男成きたば葉
平乃面影これなるや我なり
らむかりや常乃姿ハ忘ほ
めら花の色あって身ひとつに在風
の寺乃鐘もほのぼのと明けハ古寺
乃松風やをちこちの夢も破らで
醒まさむゆめハ破れまぬきまよふらむ

鉢木

次第 行衛さためぬ道なれハ
行衛さためぬ道なれハ来し方も
いつくならまし 是ハ一所不住の
沙門にて候 我此程ハ信濃国に候ひし
か あまりに雪ふかく候ほどに冬の間ハ
鎌倉にまかりのほり修行に出で
やと思ひ候 信濃なる浅間の嶽

に立煙〱遠近人の袖さむき

吹や嵐の犬井山もとより身をは

とうしの里に入そうき世を離るゝ坂

ぢもこの哀れはうき井門かさりつゝく乃

行暮れや佐野のわたりに着にけを

早く　詞　急くほとに上野の国佐野に着く

わたりに着けば荒咲よや又ことの

なりまあとてゆけ前に宿をかりうや

と思ひ候いかに此屋の内へ案内申候

ワキ　謡

誰にて渡り候ぞ　ワキ　是ハ修行の者にて候

て候一夜の宿をかし給り候へ　シテ　安き間の

事なれとも主の留守にて候程に

お宿をは叶ふまじ　ワキ　さらは帰り来

見え候は待ち申さうずる　シテ　それは

兎角もかくれバわらハて外面へ出る宵
此由を申さんと思へバ何か内
なる魔ふかうた女ある人の面白う
作らんずれバ宮し鳥鵜毛よ似せて
散乱し犬ハ鶴毛をてらく彰て俳
何をとりえずされハ今へる宮しもだ
ア人〆まるまかさるを九が我ハ霧鶴毛を

きて彰て俳何を入ぬ抜き〆らく
抽せる細命宮陸奥のぎよれ鬼さ
せどうでさんば気面白うんの雪れ日を御
おうまゆうんや此大ハ宮しよ何とも
見しまでちまんては入てそ
似る君乃は入て今の夜のは宿し作は
狩よ御留守の内申て人々ハば仲り

道すがら寒さも心にかゝり候得共見送
くまゝて樋口の茶屋にて休
み候所出立いたし一両日
其後翌日ハ早朝より大宮
まで前後を急ぎ候て漸く一泊の
宿をとり安心の事にて候
翌日ハ吉野ざとより御宿へ付き候ま

やく見え吉野ハまつ候
ミち近き二一里を立候へ留り
いんへ丸が様子申上候ゆへ様子かわり
様子申上候宿ハ思ひもよらぬまゝ
て見えより十八町あまりにて山本の
里まで九泊り候て日々夏の
ま一足もはやく御出立へ候ハ赤を

ありし有ましひかく作り 〽げに痛
ましきハ梅つるもだわやとハしまし粉
うるみの 〽あら曲もしきやよしれさし人
を待してはあられ 〽情ましや我しか
様よ襄めらもお世の戒りつさおさ
ねなりぎめくハらつれへよ値遇ド
てもうばの世れたよのしともあるへきれ

然るべくハ御宿をしまいらせさぶらへ
シテ〽左様よ思召さハ行とくハ前よハ候ハヾ
さあそびいや此大雪よ遠くハ御出
候ハじ集井門つきのとめやしは越して
おみつく旅人お宿しまいらせうとなう
れ大雪よやうやもやうのなきにこんだ痛
さしれにかう様中あかぢ本かう一里ほど道

さりとれハ今の雪より方さまよひ
一所よりもまさりて袖打
はらふよ影もなき古郷の空は
似たるうらや駒とめて袖打払ふかけ
もなし佐野の渡りの雪の夕暮か
様に詠しハ大和路や三輪が崎なる佐
野の渡り是ハ東路の佐野の渡りの雪

れ雪の夜をさるよ迷ひ来給ひしよりも
かヾ君妻をと上り東を渡り給へや宿
思しも旅の宿假初ながら値遇
の縁一樹の陰の宿りとも此世ならぬ
契りなりそれハ雨露の陰思ひハ宮
の軒すがりてぞ旅ねする此宿板ゑ
よしなやとてもかくも いかに上

お宿ハ申て候へとも何かともなくして候
扨うちたる枕もなすくハさゝすよ　枕
邯鄲に粱の飯の間に昔しら
まさハしまきる也　シテ　御しハ具也とは
扨しハうたにとはゞお宿申てはへとも行
みてもしまるさうきる枕としおくは枕
邯鄲に粱の飯の者也とはぐるし

かくハ候文言まさくへ　此れ社日也一乃
事にて給りく　シテ　あら有難文吾まゐらう
まれと仁ほごきめ系もを存まじゆへ
心得申候　シテ　扨て黄粱と申ハ古へ
世に行はれし時寄奇に讃詩に作り
たると社家ではよろこべハ此粱を好く
身命も捨さがかるや盧生かなし栄

栄の身ハ五十年其邯鄲乃うたゝ枕
一すいの夢ハさめし粟飯かしき
ほとそうしがちれやきに抑もしうも
も猶く身のもとし背きてみるまもらば懲も
事もかりつきまなみハ諸人をよ加獲
まるくもとこうれたる故郷乃松風
さかきさ夜よ更行けまるハ身も

乃ひかび行思出れりへき 夜乃かうゝハ
隔ひらく次第に重く成ゆけば行てこう那
火ニ焼てありてしまきんへきや思ひ
おしたるやれん鉢の末を持らぬ是
を切火によたいくありてとつ 宮く
鉢末れんよ さしん菓子さく有し附る
鉄末ニもと兜ね多末も集めそらて

ゆへしやか様乃都に成ばつやく末
まさしく二字と梅皆人ごとにあらそひ
去ぬる人々も梅桜松を持くらぶる
乃雪持たる衣なれども葉も秘蔵なる
へよもと木の松にて都に是を守
たきあてやけうちるなる いやく
是なき思ひもよらぬるよなくば法心さん

おそ都の内に在ば自然の也おとし出す給
きん時の討よて此内に守て思ひもよ
頃此作 いや世此分八埋木の花も候
世は昔あるらんまで今山吹は哀ひ
そうし ゆにつゆ成都の末ぞ咲分
見たるよくある是をし誠に義
行乃法の薪と思召き 志をとし山福

ゆきみける仙人はついにせんきん
翁 かく法ありとも我をもて
捨人の為乃針末きるらくもよふや
うらしとうらはらひらくされハ面
白やつたきんのみを求め候をいふ
窓乃梅の如面も雪封てさえき
みをしおり末よりさけさをそへ梅と

きかをやそれちうさかむかしの人より
うきれ山里乃かわりも垣の梅ハさうた
情ありともいろうひ翁ハ家にあ
相つしと思ふ思ハきや桜をされハ
書さらハ花をうつ近きれハ乱れ末や
傾きし心をつかハしそえしよ入ハ為
我のことひらきまし家桜切るへくハ

桜にあまそられき梅松はなさしを
きを好枝をためぬ鉢に植をもちてうる
あれにしうへおきさせぞれにも風吹
まつ八本来ときいえて薪となるる
梅桜切くべて今そみかさり常士常
く火へあゝあありよくよりてたまり
給へやと悦さい火にたきたり思きさて

忘れてハ御出ましを秘もしたるに火に
あまりてハいまに中ハまるのなるらむ
さて何とよみそ候ハいや葉
名字をしあさ去ありく何と何たる
此人と良つらひも自然の時の
為ありく何乃者ともへさげの名字を
承りいへし 汝上六何せの侍く三くへさい

是ハ佐野の源左衛門尉常世かなれる
果にて候されハ何とてか様の落ふれ
御身ハ成給ひて候そさん候一族
ともに押領せられてか様の身と成て候
あれとも今にても行とて鎌倉へ上りけれ
ても具たけれハなるそ運乃無き間ハ
最明寺殿さへ遊行に御出上ハゞか

捨れておちふれて候へ共具足に
武具一領長刀一ふりをあれハ馬をも
一疋つなきて持候具足ハちきれ
たりとも鎧金に御大事のためハ持されて
なりとも此具足を投かけさびたる
手にとらし長刀を持痩たりともあれ
馬に乗一番にかけまいり着到につき

依合戦をしまらハ敵大勢有ならく
もろくも一番に破て入思ふ敵とよき
あひ打のひきあひ汗水に流れ泌まく
あまらハあまらに飢につきまて死なん命
助ほうまに会れかけりそやよや
身のかくてハ生てし只我めが我薩摩守に
あらんほとよくそしまりんめ聞して

出る也やわが行けりれちかやゞちしめハつ
むかし我宿のさしもなくるもとのへてもも
志ぞとまり給へや薩摩のくまの住入
らバ知りくさひの宮の見れ御宿へ
宿を借し者なまりいかにく宿をかり衣
きのふそうまり給へや名残ハ宿に
さまれども聞して御出のさらバ

よ常世まかり入自然鎌倉に御
くりあらハ、寺のまじはりかう法師
あり甲斐くもいかなまきれたびたびられ
縁にあひやうかんが世法捨させ給ふあとを
づひまでも出船ならもに名跡やかけ
寂しくいつこあれなる様人鎌
倉へ執れらきいよハ滅の行ありしさし

そのかれきさう有らん東八ヶ国入
大名小名思ひくの鎌倉へ入ざるさへんうす
みしらん白具金物打たる急けの具足に
金銀をのべたる太刀かたなかうる
馬に乗ける人甲冑をそろひ世々に打つ
まくられ中に常世が常世の疵りける
馬よのらやうらめのでのたきめもあら

けるきしよさぞてまうさんとおもへども
源氏の勢をまのあたり心あるものはさながら
ひけうの鎧たる痩たる馬に道をそや
去らぬきよくよりさきよしなきこそ御軍の
身よりをはなれたる痩たる馬にはのりてども
あまたれどもけふはさへひとまねの弱車
乃葉ちるあはれは追懸ゆかれつゝ

源氏の御前より国々の軍勢
たちまち皆ことごとく有らむとおもはゞく
しまりてゐ　甚強軍勢の中にまづつゞく
ちぎれたる兜をきせかけて長刀を
持ちやすきとて自身ひつさげて武者一
騎よりつゞいて洗方へかかれとやりけるへ
是をみし源氏の甞はあまりみゆ君

よろしれ御所には法軍執の手にまゐらする
れはかゝる見さきもひかる長刀を持
痩たる馬にのりひくたる武者かゝ
しげく尋て御前へ参れとの事
和云 畏てござる シテ 何事にて候
そ 和云 急ひて御前へ御参り候へ
シテ 何と某に御前へ参れとや 和云 中〳〵それ

事 シテ あら思ひよらずや定めて大
事であらうて 和云 いや〳〵其方ならず
かさねて子細は法軍執の手にはづれたるにも
見え者数武者をつれて参れとの由
事なれども其方ほとしたゝる
き武者もいひなく候やいかゝなく候
参れ シテ 何とそれへは法軍執手にいづ

なふし見る吉野武者よし手柄ともや　中々
者事　シテ「扨こそ楽うけたまはりつ良
衆徒達にも申し候へ　ツレ「心得申し候　シテ「さら
ば見ても心の内を知らず某が敵人謀叛人と
申上御前より召出されけるへともねら
ぎんたつおよしくもれもちうあ
げそく此前より参らんと大衆さて

凡度をは今度のもの中うちよくより
御前る兵衛の佐ほれしくあるとも
為佐御前にては法侍かは叔父あまこの
御目をひき拾とはりまるひある
ゑやよ　よし　あひのやされてもおろ
失よさひ長刀屋うよう子揺かべける
ひましろ乱色もれく参りて此あるよ

欲る〳〵金いつかあらじすまるハ佐野れ
源左衛門尉常世か是迄修そやの大
雪に宿かし修行の者に見へかされ
と有りて佐野かちかくよろしくなれ
ばかりもなき銘金にも大事あれ
まことハなきれ当りとも具足ありて
拝趣ざれハ太真も力を持護る也

ともいれなるに無實一番に能しまでつきは
申候うたがひなしされどもあるへきもして
じまりたる社神仏なれどもしかれ
様つくひべき金の事にあらば常世か云
ばかりの上へ真の偽りあらん為也又曲
参れ人にも術能あらいかにも理非に
よりて真の法につきし様子の私也けれども

げにのちのためには常世が本領佐野の庄
三十余郷を返しあたふる処也又何より
も切なりしは大雪降りて寒かりしに
秘蔵せし鉢木を切り火に焚きてあて
し志をばいつの世にかは忘るべき
いでその時の鉢木は梅桜松にてありし
よな其返報に加賀に梅田越中に

桜井上野に松枝合せて三ヶの庄
子々孫々に至る迄相違あるまじき自
筆の状安堵に添へてぞ給はりける
上シテ 常世是を見て是を給はりて三度戴
はりは是迄なりやよろこびの
ひらきとかへる本領の佐野へ気をさそふ
うら山しくや思ふらん梅田帰国の諸軍勢

皆御暇給り舊郷へとこそ帰りける
其中に常世ハよろこびのまゆを
ひらきつゝ今こそいさめ此馬に打
乗てかうづけや佐野の舟橋取は
なされし本領に安堵して帰るそ
うれしかりける

羽衣

風早の三穂のうらはをこぐ船の浦
人さはぐ波路かな是は三保の松原
にはくりうと申漁夫にて候萬里の
高山に雲忽に起り一樓の明月に雨
始て晴り実に長閑なる時しもや春の
けしき松原の浪立つゞく朝霞月

も残りの天乃原及ひなき身の詠めにも
心空なる気色かな　忘れめや
山路を分て清見かた遥かに三保
乃松原に立連いさや通ハん
上哥　風向ふ雲の浮波立と見て
釣せて人や帰るらん　待て
しはし春ならハ吹ものとけき朝風の松ハ常盤

乃声そかし波ハ音なき朝なきに釣
人多き小舟かな　我三保の松原
に上り浦乃景色を詠むる處
に虚空に花降音楽聞え霊香四方に薫
す是たゝ事と思ハぬ處に是なる
松に美しき衣掛りよりて見れハ色香
妙にして常乃衣にあらすいかさま

帰り古き人ハかせ家の宝となさ
ばやと存候〔シテ〕なふその衣ハ此方のにて候
何しに召され候ぞ〔ワキ〕是ハ拾ひたる衣
にて候ほとに取りて帰り候よ〔シテ〕それハ天人
の羽衣とてたやすく人間にあたふ
物にあらずもとのことくに置給へ〔ワキ〕そも
此衣の御主とハさてハ天人にてまし

ますかやさもあらハ末世の奇特に留あ
をき国の宝となすへき也衣を返す
事あるまし〔シテ〕悲しや羽衣なくてハ
飛行の道もたえ天上に帰らん事も
叶ましさりとてハ返し給へ〔ワキ上〕此
詞をきくよりもいよいよはくりやう力をえ
もとより此身ハ心なき天の羽衣とりかく

しほ〳〵として立ゐたり今はさ
ながら天人も羽なき鳥の如くにて
上らんとすれば衣なく地に又住めば
下界なりとやあらんかくやあらんと
悲しめど白龍衣を返さねば力
及ばず詮方も涙の露の玉鬘
かざしの花もしほ〳〵と天人の五衰も

目の前に見えてあさましや天の原ふり
さけ見れば霞たつ雲路まどひて
ゆくへも知らず住みなれし
空にいつしか行雲の浦山しきけしきかな迦陵
頻伽のなれ〳〵し声今更にわづか
なる雁がねの帰り行天路をきけばなつかし
や千鳥鴎のおきつ浪ゆくか帰るか

か春風の空に吹までなつかしや
ワキ いかに申候御姿を見奉れば余りに御痛
はしく候程に衣をかへしまいらせうずるにて
候 シテ あらうれしや此方へ給り候へ ワキ 暫く
承り及びたる天人の舞楽只今爰にて
奏し給はゞ衣を返し申べし
シテ うれしや扨は天上に帰らん事をえたり

此悦びにとてもさらば人間の御遊の形
見の舞月宮をめぐらす舞曲有只今爰にて
奏しつゝ世のうき人に伝へ
奉らんさりながら衣なくては叶ふまじさりとては
先衣を返し給へ ワキ いや此衣を返しなば
舞曲をなさで其儘に天にやあがり
給ふべき シテ いや疑ひは人間にありて天に偽なき

きものをあら恥かしやさらはとて羽衣
をかへしあたふれは乙女は衣を着しつゝ
霓裳羽衣の曲をなし天の
羽衣風に和し雨に潤ふ花の袖
一曲をかなでゝまふとかや東
遊のするが舞この時やはしめ
なるらん夫久方の天といつは二
神出世の古へ十方世界を定めしに空は
限りもなけれはとて久方の空
と名付たり然に月宮殿のありさま
玉斧の修理とこしなへにして白
衣黒衣の天人の数を三五に分つて
一月夜々の天乙女奉仕を定め役
をなす我も数ある天乙女月の

身を分て仮に東の駿河舞
世に伝へたる曲とかや春霞たなびきにけり
久方の月の桂の花や
げに花鬘色めくは春のしるし
かや面白や天ならでここも妙なる天
津風雲の通ひ路吹き閉ぢよ乙女の姿
暫し留りて此松原の春の色を三
保が崎の月清見潟富士の雪いづれ
や春の曙類ひ波も松風も長
閑なる浦の有様其上天地は何を隔
てん玉垣の内外の神の御末にて月
も曇らぬ日の本や君が代は天の羽
衣まれにきて撫づともつきぬ巌ぞと
聞くも妙なり東歌声添へて数々の

ちやうきんくご孤雲の外にみち〳〵て
落日の紅ハ蘇命路の山をうつして
緑ハ波に浮嶋が払ふ嵐に花ふりて
げに白雲の袖ぞ妙なる
南無帰命月天子本地大勢至
東遊の舞の曲あるひは天津み
空の緑の衣又ハ春立霞

の衣　色香もたへなり乙女の裳
裾さゆうさゆう颯々の花をかざしの
あまの羽袖なびくもかへすも舞の
袖あづまあそびの数〳〵に
其名も月の色人ハ三五夜中のそら
にまたまんぐわんしんによの影となり御願圓
満国土成就七宝充満の宝をふらし

らし國土に是をほどこし給ふ去
ほどに時うつて天乃羽衣浦風に
たなびきたなびく三保の松原うき
嶋が雲のあしたか山や冨士の高根
かすかに成て天津みそらの霞に
まぎれて失にけり

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛